

梅鶯仏教壮年会報

第100号
2012年
9月22日

親鸞聖人七百五十回

大遠忌法要

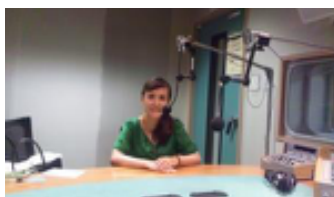
十月六日(土)

午後二時 法要
午後三時半 コンサート

法輪寺の親鸞聖人七百五十回大遠忌法要
が、梅鶯仏教協賛のもと、いよいよ来月6
日(土)に厳修されます。五十年に一度の
法縁です。是非ともご参拝下さい。



やなせななさん
全国で活躍中です



NHK「ラジオ深夜便」
に出演中のやなせさん

一人居(い)てしも喜こびなば
二人と思え二人にして
喜ぶおりは三人(みたり)なるぞ
その一人こそ親鸞なれ

(「報恩講の歌」より)

十周年お祝い申し上げます

田村 富美子(京都)

梅鶯仏教壮年会が十周年を迎え
られましたこと、心からお祝い申
し上げます。
貴会員の皆様には、報恩講、例
会のお勤めをはじめ多彩な行事に
熱心に取り組まれ、ご参集されて
おられますことお喜び申し上げます。
会報誌も今号で100号に到
達いたしました。これまでの多く
のご活動が一つひとつ実を結ん
でいった結果の表れと深く感銘
しております。
私も毎回、会報を拝読し皆様と
共に、ひと時でも同じ喜びを味
わせていただきたき誠に有難く
感謝いたします。
私は退職から5年を数え、老親
をお浄土に見送ってから1年が
たち、お蔭様で平穩に過ごさ
ただいております。
朝は夫、息子、娘夫婦、孫を
顔で送り出し、夕べにはそれ
の帰りを待つ安らかな日々です。
急病な自分、そんな日常が時
ときがあり、感じられ不安にな
る。そんな折、貴会の十周年に
り寄稿されたという事で、これ
に発刊された会報を改めて味あ

せていただく、会報88号で
「作家の五木寛之氏が、インド
で人生を4つの時期に分けて言
い表す言葉があり、4つ目の時
期である『遊行期』、これこそ
が大事だと仰います。その意味
合は、人生の終盤を迎える時
期で、この時期が最も大事な時
期である。この私が人生の行き
着く先、帰り着く先、待つてく
れている人を目当てとして、安
心の中で過ごさせていたたく時
期で、この時期こそが、人生の
最終目標で最も尊く大切な時
である。」と説かれています。
「私自身も丁度、この時期に当
たらうかと思ひます。
生活の中ではいつも待つ身の
私、待つていて下さる「親」
がいることを教えて下さって
ます。有難いことです。
阿弥陀様の呼び声を頼りに、
心豊かな人生が送られるよう
歩みを進んでまいります。
最後にになりましたが、皆様の
お健勝と今後ますますのご活躍
をお念じ申し上げます、またお目
にかかれる日を楽しみにいたし
つ筆を置かせていただきます。

題材法話

正信偈を味わう①⑦

お七高僧となり、最初は源信

和尚です。

た、最初の頃は、日本へ伝来してき

の、文化として新しい仏教外国文化

の方に、人々の関心が向けた

思われていたのでは、ないかと

透さるべき大きな役割を最初

に果たされたのは聖徳太子

です。

が、本格的に日本の中で浄土教

生れたのは、源信和尚の『往生

要集』によってです。

8年、源信和尚の生れ

が、942年、すから、実

400年以上経つてからと

いうことになりす。

○『往生要集』の偉大さ

中、三巻に『往生要集』は、上

で、この書に法然上人の書

人もこの書に法然上人の書

また親鸞聖人も若

また親鸞聖人も若

また親鸞聖人も若

また親鸞聖人も若

また親鸞聖人も若



「善信」の一字を源信から

頂かれた上で、日本浄土

教の歴史、多大な貢献を

なされた。

も、また、社会的・文化的に

平等院の鳳凰堂の造営、宇治

清少納言の『枕草子』や紫

式部の『源氏物語』にも往

生要集や源信和尚のことが

出てきます。

く、さらには日本だけではな

中国にも渡り、多くの日本

に影響を与え、と称された

教主源信大師

ほどです。

生要集』といえ、地獄の話

が、書かれた本、さるに、

の、こと、行、を、し、な、め、

て、説、か、れ、た、書、物、と、

し、よう、か、た、？、それは、

『往生要集』は、申し上

げ、る、ま、で、も、な、く、往、

説、か、れ、た、書、物、な、の、

最初、の、導、入、部、分、で、私、

早、く、こ、の、世、を、離、れ、

た、め、に、思、わ、れ、る、

鬼、畜、生、等、の、六、道、



描、写、し、て、い、ま、す、と、

そ、の、中、の、地、獄、の、描、

り、に、大、き、な、衝、撃、を、

人、に、大、き、な、衝、撃、を、

が、て、地、獄、の、描、写、が、

て、描、か、れ、る、よ、う、に、

に、な、つ、た、た、め、に、その、

誤、解、が、生、じ、た、の、で、

○源信和尚とお母さん

の、源、信、和、尚、の、生、

文、化、的、で、美、し、い、自、

れた、幼、い、頃、から、大、

優、れ、非、凡、な、少、年、で、

日本、の、最、高、学、府、で、

観、山、で、早、く、か、ら、学、

ま、し、た、。

揮、予、想、通、り、優、れ、た、

な、ら、高、僧、と、呼、ば、れ、

は、優、れ、し、な、が、中、に、

び、し、な、さ、を、兼、ね、備、

んの、存、在、が、あ、り、こ、

ピ、ソ、ー、ド、が、残、つ、て、

天、皇、の、前、で、一、称、讃、

と、い、う、お、経、の、講、義、

です、。



れ、す、ぐ、に、『僧都』とい

高、い、位、の、称、号、を、与、え、

の、褒、美、を、贈、ら、れ、ま、し、

で、そ、こ、で、源、信、和、尚、は、

で、一、人、暮、ら、し、の、母、親、に、

送、ら、れ、た、の、で、す、。

と、こ、ろ、が、母、親、か、ら、す、

その、品、が、送、り、返、さ、れ、こ、

し、た、。

後、の、世、を、渡、す、橋、と、ぞ

思、い、し、に、

世、渡、る、僧、と、な、る、ぞ

悲、し、き、

『人々を仏の世界に導

く、僧、に、な、つ、て、く、れ、

喜、ぶ、僧、侶、に、な、つ、て、

に、源、信、和、尚、は、す、ぐ、に、

し、て、い、い、よ、い、に、思、

も、と、や、が、て、日、本、の、

母、の、臨、終、に、お、い、て、

で、お、念、仏、の、功、徳、を、説、

旅、立、た、れ、た、さ、う、で、す、。

源、信、は、母、に、導、か、れ、

に、入、り、母、は、わ、が、子、

の、よ、つ、て、浄、土、往、生、に、

7月例会住職法話より